

南房総から新たな風～サトウキビの栽培・有効活用～

活動の経緯

少子高齢化や過疎を背景として、農業生産者は減少し、生産額の低迷や耕作放棄地の増加が今日の問題となっています。このような課題から今回のプロジェクトは、南房総は平均気温も高く、海岸沿いは無霜地帯であり温暖な環境がサトウキビ栽培に適しており、地域の生産物にできないかとお話を頂きはじまりました。

活動の概要

南房総市、ペナシユール房総、千葉大学との産官学連携によるサトウキビ栽培の実証実験、生育調査、収穫後の搾汁液の有効活用の検証



サトウキビ収穫風景



市原ぞうの国へ飼料として提供

活動の成果、実績等

令和4年度、サトウキビ栽培の実証実験を行い、ペナシユール房総より苗を受け取り、圃場100㎡に定植しました。発芽が始まり、発芽、生育調査を開始しました。また、ペナシユール房総、日本熱帯果樹協会と生育確認し、サトウキビが大きくなる前の7月頃が追肥のタイミングとアドバイスをいただき、追肥を実施しました。サトウキビは順調に生長し、ゾウの飼料として市原ぞうの国へ提供できました。収穫はサトウキビを刈り取り搾汁液にしました。搾汁液は、鍋で煮詰め糖蜜へ加工しました。

令和5年度、継続して栽培を行い、糖蜜は加工部門で黒糖パンに製造され、食味調査、商品化の検討も行いました。

令和6年度、ペナシユール房総のみでなく南房総市や千葉大学も連携できることとなり、栽培面積を300㎡増設し、栽培経過より多くの肥料を必要とし、沖縄などでも多くの肥料を施肥していることを参考に元肥を多くしました。苗としてサトウキビを約300本刈り取り押切で切り、苗を約2000本作り、地域連携事業としてペナシユール房総、南房総市協力で定植を行いました。

サトウキビは南房総地域で栽培ができ、市原ぞうの国への飼料提供、搾汁液の糖蜜化と成果を得られました。収穫時のサトウキビ糖度は20度と平均糖度13度と比較しても非常に良い品質のものが作れました。また、栽培は管理に係る手間が少ない反面よく育ち、定植も5年に1回程度のため、耕作放棄地での活用に向いていると思います。